

震災後の方言景観に見る福島県会津方言の変容

斎藤 敬太

1. はじめに

2011年3月11日に東北地方の太平洋沿岸を中心に甚大な被害をもたらした東日本大震災は、社会言語学の研究にも変化をもたらすことになった。これまで被災地での医療行為を行う他地方出身者の方言問題（竹田 2012、今村 2015 など）や、被災地の外国人住民の方言問題に関するもの（山下 2014 など）など、様々な研究がされてきた。本稿で扱う福島県会津地方は、東北地方の中でも地震による直接的な被害はあまりなく、復興を目指す東北の観光地としても早いうちから PR された。そのため、今まで以上に盛り上がった観光事業により多くの方言景観を目にするようになった。本稿では、震災後の会津地方に見られる方言景観を見ていくことにより、会津方言の変容について考察していく。

2. 会津の観光と方言景観

会津地方は鶴ヶ城、喜多方ラーメン、猪苗代湖、磐梯山のある北部から、大内宿や尾瀬などのある南部まで観光資源が豊富なため、震災以前から観光地として賑わってきた。

震災後、会津の観光産業を盛り上げたのは 2013 年の NHK 大河ドラマ『八重の桜』と言える。これは幕末の会津藩士の娘である山本八重（後の新島八重）を主人公としており、物語前半の舞台は会津となっている。放送前後から福島県としても会津観光の大々的な PR 活動をした。会津は震災後、風評被害などで観光客の足が遠のいてしまった時期があったが、そのような経緯もあり観光客は戻っていった。

そんな会津地方では、他の地方（ロング 2009、中井 2011、ロング・今村 2012、井上他 2013、ロング・斎藤 2016 など）でも見られるような方言で書かれた看板やのぼりなどが多く存在する。本稿では、そのような方言景観、特に観光客向けのものを中心に、会津方言の変容について見ていきたいと思う。田中(2016)では、方言景観について分類されているが、本稿で扱うのはそのうち「方言メッセージ」及び「方言エール」にあたる。

3. 方言景観を扱う意義

本稿ではあくまでも「方言景観」に注目しているため、言語面での記述が住民の話す会津方言の現状とは必ずしも一致しない可能性を含んでいることを予め断っておく。そうでありながらも方言景観を扱って会津方言を考える意義としては、「言語環境」というキーワードを挙げる事が出来る。方言景観は、観光客向けであれ地元住民向けであれ、地元住民にとっては普段町を歩くと様々な場所で方言を目にするという点で、彼らの言語環境を形作る要素の一つとなる。そしてそのような環境を作り上げる

のも多くの場合は地元住民である。彼らのことばを考える時、まずは彼らの周りにおける言語環境から見えるものを頼りにしていくという手法は有効であると考え。言語環境としての言語景観については、外国人集住地域で見られる多言語景観について取り上げたものとして斎藤・志喜屋(2014、2015)、斎藤(2015a)がある。筆者は、2013年7月～2016年2月にかけて、6回にわたる会津地方での方言景観調査を実施した。本稿ではその際に撮影した方言景観に見られる会津方言を中心に、会津方言話者への聞き取りなども併せて考察していく。

4. 会津地方と会津方言

まず、本稿で扱う「会津地方」と「会津方言」について述べる。

本稿の「会津地方」は、福島県の慣習的な地域区分である3地方(「浜通り」「中通り」「会津地方」)のうちの一つで、おおよそ奥羽山脈以西の一角を指す(図1)。

「会津方言」に関しては、一般に会津地方一帯で使用される方言の総称として用いられる場合もあるが、本稿で扱うのは主に会津地方の中心都市である会津若松市が位置する会津盆地(会津平)一帯で使用される「会津平方言」¹であるため、特に断りのない限り「会津平方言」を指すこととする。菅野(1982)の方言区画を参考にすると(図2)、本稿では $\text{会}①$ が会津方言となる。また、 $\text{会}②$ の方言についても言及するが、本稿では「南会津方言」とする。

5. 大河ドラマと方言景観

2013年7月の調査では、『八重の桜』が放送中の時期であり、至るところで『八重の桜』の主人公である

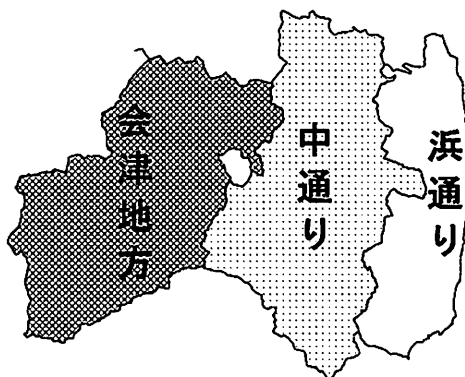


図1. 会津地方の位置



図2. 福島県の方言区画(菅野1982:367より)

¹ 菅野(1982)p.367

八重をモチーフにしたキャラクター「八重たん」が見られた。そしてドラマで八重は終始会津方言を話すという設定も相まって八重たんには会津方言のセリフが添えられることがほとんどであった。

郡山市と会津若松市を結ぶ JR 磐越西線の車両の外側には、八重たんと会津方言「よく来らったなし！」（よくいらっしやいました！）がプリントされていた（図3）。



図3. よく来らったなし（2013年）

なお、「来らった」の読みについては、「きらった」とする場合と「こらった」とする場合の両形が見られる（図4）。両者ともに会津若松市内で撮影したものである。左は商店の入り口の暖簾、右は観光地である飯盛山の土産店にあった。

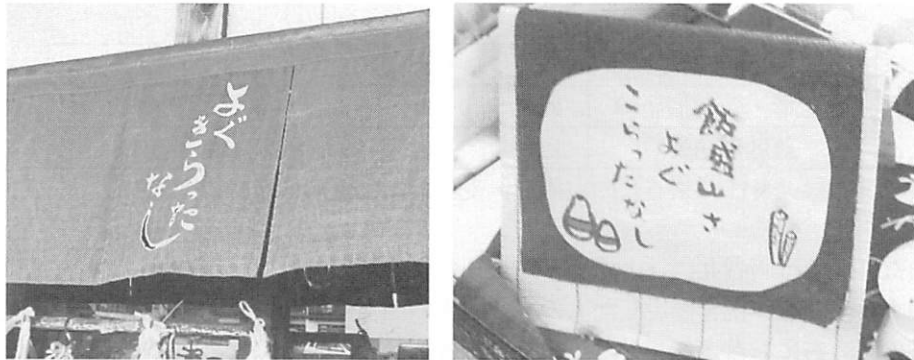


図4. 「よぐきらったなし」と「よぐこらったなし」（2016年）

しかしながら、児玉(1974)や龍川・佐藤(1983)を見ると、共に「キラッタ」の項目があるものの、「コラッタ」に関しては存在していない。これに関連して、会津方言話者の50代女性（以下A氏）、50代男性（以下B氏）、80代男性（以下C氏）に対して「きらった」「こらった」についての聞き取り調査を実施した。A氏は20代から関東地方に移住したがそれまでは会津地方に居住しており、移住後も定期的に会津地

方に行き来している。A氏は、「きらった」「こらった」両語形とも聞いたことがあるが、どちらかと言うと「きらった」がよく使われていると語った。B氏もA氏と同じく20代から関東地方に移住しているが、彼に関しては「きらった」は聞いたことがあるが「こらった」は聞いたことがないとした。また、会津地方の生え抜きであるC氏は図4左の暖簾の設置者である。C氏は「きらった」「こらった」両方聞くが、C氏自身は「きらった」をよく使うと話した。

以上より、「きらった」が会津方言における従来の語形で、「こらった」が比較的新しく現れた語形である可能性が浮上する。会津方言の動詞については可能形・受身形・尊敬形の語幹が共通しており²、1979～1982年に調査した国立国語研究所編(1999)及び国立国語研究所編(2006)では、「ここに来ますか」(一般動詞・尊敬動詞共に)の図で会津地方は会津若松市の“kirahak-kasi”など“ki-”から始まる語形のみで、会津地方全体を見ても“ko-”から始まるものが分布していない³。また、「来ることができる[状況可能]」として会津地方では“kirareru”系のみ、あるいは“kirareru”系と“korareru”系が併存していることになっている⁴。しかし、上記インフォーマントへの聞き取りの際、「来る」の可能形及び受身形について語幹が“ko-”であることを確認し、“ki-”は聞いたことがない、“ki-”にしてしまうと「着る」の意味になってしまう、との話もあった。

これらをまとめると、従来可能形・受身形・尊敬形の語幹は全て“ki-”であったが、先に可能形・受身形の語幹が“ko-”に取って代われ、その後尊敬形の語幹としても“ko-”が使われつつあるのではないかという推測を立てることが出来る(表1)。可能性としては命令形“ko(:)”あるいは標準語の可能形・受身形・尊敬形の語幹“ko-”の影響も考えられるが、当然ながら本稿の調査のみでは断言出来るものではなく、今後これについての本格的な調査が必要であると考えられる。

会津方言	買う	見る	来る
可能形・受身形語幹	kaw-	mi-	ki- → ko- (早い段階で)
尊敬形語幹	kaw-	mi-	ki- ⇒ ki-, ko-

表1. 「来る」の可能形・受身形・尊敬形の語幹の変化

また、図4は両者共に「よぐ」と記されているが、これは会津方言における語中語尾のカ行子音有声化を再現したもので、図3の「よく」と同じものを指す。会津方言以外の諸方言にも言えることだが、特に正書法はない。そのため語中語尾のカ行やガ行についてはしばしば表記のゆれが見られるが、それについては稿を改める。

2013年7月の時点では、会津若松駅内の改札脇の通路に「会津弁特集!!」と題した方言クイズが設置されており、標準語訳を併記した解答も配布されていた(図5)。

² 菅野(1982)p.389

³ 国立国語研究所編(2006) 第278図、第279図

⁴ 国立国語研究所編(1999) 第178図



図5. 会津方言のクイズ (2013年)

通路を挟んで図5のクイズの反対側には図6の「八重のふるさとさ よく来らったなし!」(八重のふるさとに よくいらっしやいました!)と書かれた記念撮影用のボードも確認された。こちらでは、八重たんが俵を担いで「さすけねえ!」(大丈夫!)と発言している。



図6. 八重のふるさとさ よく来らったなし! (2013年)

会津若松駅を出ると、出入り口に「よく来らったなし!」と大きく書かれた横断幕が掲げられていた(図7)。このような横断幕は、会津若松駅に限らず喜多方駅など

会津地方の他の駅でも見られた。このように、大河ドラマに絡めた方言景観は、会津地方の至る所で目にすることが出来た。



図7. 会津若松駅前の「よく来らったなし!」の横断幕 (2013年)

上述のように 2013 年時点では会津地方の様々な場所で見られた大河ドラマの方言景観であったが、このような形で増えた方言景観は長続きはしないようである。図 5 の方言クイズに関しては、2014 年 2 月に調査した際には既に撤去されていた。また、図 7 の横断幕に関しても 2016 年 2 月の時点では撤去されていた。つまり、これらに関しては『八重の桜』放送終了後、次第に撤去されてしまった流行的な方言景観であったと考えられる。図 6 のボードに関しては 2016 年 2 月の時点でも設置されていた。

このように、大河ドラマの影響で多くの方言景観が設置されたとしても、一時的な流行の一つとなってしまう場合は、早い段階で消えてしまうことが確認出来た。

6. 方言分布の変化

観光客向けの看板などを見ると、そこに書かれた方言が従来からその地域で使われる方言ではない場合もある。図 8 の看板には八重さんの発言として「八重さんのふるさと 会津さよぐ来たなし ありがとなし まだ きてくなんしょ」(八重さんのふるさと 会津によくいらっしやいました ありがとうございます また 来てください) と、方言が書かれている。

八重さんのモデルである新島八重は、現在の会津若松市にあたる地域の生まれであるため、ここに記されているのは会津若松市を中心に会津北部(図 2 の^会①)で話される「会津方言」であると思われる。しかし、この看板が設置されていたのは旧田島町(現南会津町)の駅のホームであり、「南会津方言」が話される地域(図 2 の^会②)である。飯豊(1964a)によると、この旧田島町では丁寧を表す助詞として「ナン」(図 8 に 2 回現れる「なし」に相当する)が用いられているとされるが、当時の時点で「南会津の各地で「シ」「ナシ」「ゾシ」などの言い方が聞かれるが、これは新しい形であり、若松市などのことばの影響によると意識されている。文化・経済・政治などの面で優位に立つ若松市のことばの影響は大きいものがあると思われる」とあり、会津若松市からの影響で「ナシ」も用いられ始めていたことが分かる。会津若松市が会津地方の中心であることは現在も同じであり、この場合は南会津町が「会津地方」であることを観光客誘致に活かす際、会津の中心である会津若松市に関係のある八重さん

が（本来は南会津にはあまり関係がないにも関わらず）会津方言と共に観光客向けの看板に採用されていると考えられる。



図8. 南会津町（南会津方言域）に見られる八重たんと会津方言（2014年）

図8は大河ドラマに關係する方言景観のため、一時的なものではないのかという指摘が予想される。2014年以降は南会津町を訪れていないため、確かにこれが現在も設置されているかは定かではないが、このような南会津方言域に会津方言の方言形式が入り込んだ可能性のある例は他にも確認された。同じく南会津方言域に位置する下郷町の観光名所である大内宿にあるそば屋では「よらんしよ」（寄ってください）「こらんしよ」（いらしてください）と書かれた表示がみられるが、菅野(1982)によると、これらも会津方言で用いられる尊敬命令形“-*(ra)Nsjo*”（本稿では“-*aNsjo*”系⁵とする）であり、下郷町で従来用いられる尊敬命令形ではない⁶（図9）。



図9. 下郷町（南会津方言域）に見られる会津方言（2013年）

⁵ 「系」となっているのは、“-*aNsjo*”であると考えている一部について例外的なものが含まれるためである。その例外については7.で“-*ahaNsjo*”系の話題の際に述べる。

⁶ 菅野(1982)p.390

なお、下郷町で従来用いられる尊敬命令形は“-(ra)Qsje”とされており、大内宿には従来の方言形式を用いた「よってがっしえ」（寄ってってください）と書かれた暖簾を出した土産店も存在していた（図10）。



図10. 南会津方言の尊敬命令形「よってがっしえ」（2013年）

図9の「よらんしょ」「こらんしょ」に関しては、インターネット上の旅行記にあった写真から少なくとも2006年の時点で設置されていたことが確認出来た⁷ので、震災前から使用されていることが分かった。また、下郷町は南会津方言域とはいえ会津若松市などの会津方言域と隣接しているため上述の飯豊(1964a)にあるような会津若松市からのことばの影響は容易に受けやすい地域であるともいえ、それによって“-aNsjō”系も持ち込まれた可能性が考えられる。

また、図11を見てみる。これは会津方言域にある磐梯町の土産売り場で見られた表示で、南会津のそばを販売していた。



図11. 会津地方で見られた「がんばっぺ」（2013年）

⁷ こなん（ペンネーム）(2007)

そこには「がんばっぺ南会津」(がんばろう南会津)という方言エール(田中 2016)が書いてある。これまで見てきた観光客向けのものに地名がある場合「南会津へようこそ!」のようにその場所への来訪者(つまり観光客)が対象となるが、方言エールの場合は「南会津のみんな、がんばろう!」のようにそこに書かれた地名の住民向けのものとなる。この方言エールが、商品を製造している「南会津」の視点からエールを送っているのか販売場所(表示の設置場所)である「会津」(南会津ではない)として南会津にエールを送っているのかははっきりしないが、飯豊(1964b)や菅野(1982)によると、従来の会津方言では意志や勧誘の意味合いで“-Qpe”は使用しないとされる。会津方言では“(N)be”、すなわち「がんばんべ」となる。それでは会津方言では“-Qpe”は全く用いられないのだろうか。

そこで、前述のA氏、B氏、C氏には、「がんばんべ」と「がんばっぺ」の使用についても質問した。B氏、C氏共に「がんばんべ」を使う、「がんばっぺ」は郡山や浜通りのことばであって使ったことはない、といった意見が出た中、A氏は「がんばんべ」のほうがより会津らしくよく使うが「がんばっぺ」も使う、と語ったのである。ただし“-Qpe”については全ての動詞ではなく、例えば「起きる」について「おぎっぺ」は聞いたことがなく、「おぎんべ」しか使わないと付け加えた。更に、会津方言話者の20代女性(以下D氏)についても同様の質問を行った。D氏は会津地方の生え抜きで他地方への移住経験もない。D氏は、「がんばっぺ」も「がんばんべ」も両方使うとし、「がんばっぺ」は大勢の人に使うようなイメージ、「がんばんべ」は仲間内で軽く使うイメージであると語った。「がんばっぺ」を先に挙げたことから分かるように、他のインフォーマントのような「がんばんべ」が会津らしいとか「がんばっぺ」が他地方の方言だといったイメージがないことが窺える。つまり、会津地方では全ての動詞とは言い難いが、会津方言域でも南会津方言域でも“-Qpe”が使われていることになる。

しかしながら、A氏、B氏、C氏の回答から、「がんばんべ」のほうがより「会津らしい」という意識があることは間違いなさそうである。D氏についてはそのような意識はないものの、「がんばっぺ」は大勢に、「がんばんべ」は仲間内で、というあたりは後者の方がより地元で使いやすいという感覚の表れではないだろうか。図 12 は会津若松市内のホテルにあったバス会社の広告であるが、ここには「がんばろう福島!」と「がんばんべ会津!」の二つが書かれている。福島(ここでは福島県を指すと考えられる)に向かっては標準語でエールを送っている⁸が、地元である会津に向かっては「がんばんべ」と記している。これは福島県と会津を区別しているため、会津には「会津らしい」形式を用いていると考えられる。

⁸ 福島県に向かって「がんばっぺ」を用いずに標準語を用いていることが気になるが、ここでは触れない。



図12. がんばんべ会津! (2016年)

一方、福島県全体に対する方言エールは「がんばっぺ福島」となる(図13)。これは会津若松市内の日本料理店で出されたおしぼりの袋である。



図13. がんばっぺ! 福島 (2014年)

“-Qpe”を従来より使用するのには県庁所在地の福島市や県内最大の都市である郡山市がある中通り、あるいは東日本大震災で大きな被害を受けた太平洋岸の地域である浜通りと福島県の中でも分布域が広い。震災復興を福島県として一丸となってがんばろうという意味で使用されている方言エールでは、県内で共通性が高く、かつ政治や経済の中心である中通りの方言を中核とした一種の「福島県共通語」が用いられているのではないかと考えられる。これらに関しても、図8や図9が「会津地方」で優位に立つ会津方言を用いたのと同様に、図11や図13では「福島県」での「福島県共通語」を用いているとみられるのだ。

このように、観光客向けの方言景観では、従来の方言分布域を越えて、会津方言が南会津方言域にまで入り込んでいることや、福島県全体としての震災復興の動きで県内の共通語的な表現が用いられている実態が明らかになった。南会津における各方言の関係を図14のように示すことが出来る。

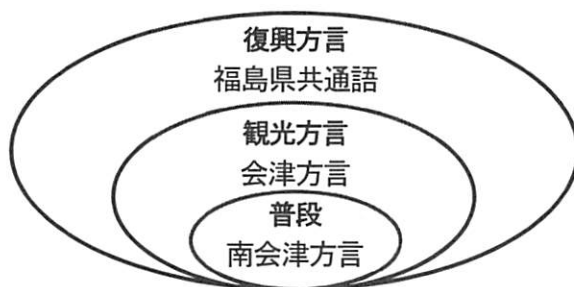


図14. 南会津の方言関係図

図のように、従来南会津方言を使用する場合でも、「会津地方」としての観光客向けの方言（「観光方言」とする）には会津の中心、会津若松市周辺の会津方言が入り込み、「福島県」としての震災復興に対する方言（「復興方言」とする）には福島県の中心、福島市や郡山市の中通りの方言を中核とした一種の「福島県共通語」が入り込むという構図が見られる。

7. 待遇表現の減少・固定化

会津方言は、福島県内の中でも他の方言と比較して敬語の発達した方言とされている。観光客向けの方言によく見られるものとして5.で見られた「来らったなし」のような丁寧の助詞「し」以外にも、尊敬語にあたる待遇表現が存在する⁹。その中でも方言景観として会津若松市内でよく見られたものが、「よってがんしょ」（寄ってください）や「飲まんしょ」（飲んでください）、「やすまんしょ」（休んでください）などの“-aNsjō”系の形式である（図15）。それぞれ店頭などに設置されていた。

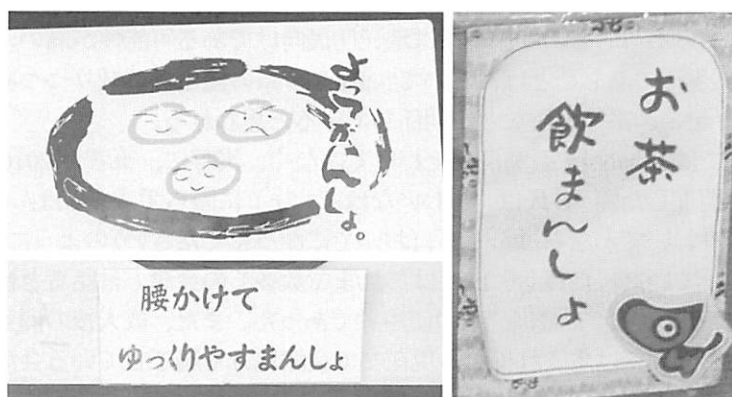


図15. 会津若松市内で見られる待遇表現“-aNsjō”系（2016年）

⁹ 実際には「来らった」（いらした）自身が標準語に直訳すれば「来られた」に対応する尊敬語であるが、ここでは尊敬命令形に着目したいため、触れないことにする。

“-aNsjō”系は「～してください」という尊敬命令形であり、これらの方言景観はこれから店に寄るであろう通行人や、あるいは買い物中の購買客に向けられたもので、待遇度としては高いものである。しかし、従来は最も高い待遇度ではない。

菅野(1982)によると、“-nahaNsjo”と“-haNsjo”という形式が“(ra)Nsjo”（本稿の“-aNsjō”系）の上位とされているが、生え抜きの会津方言話者である70代女性（以下E氏）に「来て」に相当する方言を、待遇度の高い順に言ってもらったところ、「こらはんしょ」「こらんしょ」「きっせ」「こー」と挙げ、「こなはんしょ」「きなはんしょ」「こはんしょ」「きはんしょ」などのような表現はないとした。つまり「来る」の場合、語幹“ko-”に“-rahaNsjo”を接続した“ko-rahaNsjo”であると考えられる¹⁰。なお、「飲む」の場合は“nom-ahaNsjo”となる。菅野(1982)にある“-nahaNsjo”については、標準語に直訳するなら「お入りください」となる「おわいなはんしょ／おあいなはんしょ」（いらっしやいませ）のような「接頭辞お+動詞連用形」や行為を示す名詞に接続する場合に用いられ、“owai-nahaNsjo”という形になる。しかし、“-nahaNsjo”という形式は上述の場合にしか用いられず、かつ待遇度は“(r)ahaNsjo”と同じため、菅野(1982)にならって別形式として挙げるのは適切ではない。“-aNsjō”系でも同様に「おわいなはんしょ」「ごめんなんしょ」など“-naNsjo”があるが、これも“(r)aNsjō”と同じ待遇度にあるものであり、かつ“-nahaNsjo”同様に「接頭辞お+動詞連用形」や行為を示す名詞に接続する場合以外には使われない。そのため、本稿ではそれぞれまとめて“-ahaNsjo”系、“-aNsjō”系としている。

ところがこの“-ahaNsjo”系であるが、これまでの方言景観調査においてこの形式を用いていたものは「おわいなはんしょ／おあいなはんしょ」（いらっしやいませ）のみしか見つけることが出来なかった（図16）。これらは、外からの観光客というよりは、地元住民が主な購買客であると思われる店にあった。左は会津若松市内の酒蔵の入り口、中は図4左と同一の暖簾、右はテナントショップ内に設置されていた。特に左と中は古くからある店であり、本来は地元住民向けである可能性が高い。

これには、実生活の話しことばにおいて“-ahaNsjo”系の使用者が減りつつあることや、方言景観への“-aNsjō”系の多用などが関係していると思われる。

話しことばでは“-ahaNsjo”系が消えたわけではなく、実際に、筆者が2016年2月に会津若松市で調査した際、E氏は「おわいなはんしょ」に限らず「こらはんしょ」（来てください）や「おいでんらはんしょ」（おいでになってください）のように“-ahaNsjo”系を頻繁に用いていた。ただし、E氏はこれまで数多くの会津方言話者と接してきた筆者¹¹にとって初めての“-ahaNsjo”系の使用者であった。また、成人後の関東地方での数年間の移住を除いては生まれてから現在まで会津地方で過ごしている会津方言話者

¹⁰ 一段動詞や変格活用動詞の際には接辞“い”が付加してから、“-ahaNsjo”や“-aNsjō”に接続する。

¹¹ 筆者の両親は会津地方出身者であるため、親族が来客に対して用いた方言形式などをこれまで観察してきた。

の50代男性（以下F氏）に聞いたところ、「おわいなはんしよ」は高年層の一部からしか聞かないとした。また、前述のA氏については、“-ahaNsjo”系は聞いたこともないということである。両者とも“-aNsjjo”系についてはよく聞かれるとした。“-ahaNsjo”系が“-aNsjjo”系と比較して耳にする機会が少ないという意味では方言景観の状況と似ていると言えよう。



図16. おわいなはんしよ／おあいなはんしよ（2016年）

また、そのような背景もあつてか観光客向けに会津方言を使用する際、図15のように尊敬命令形としては“-aNsjjo”系が多用されている。方言景観として“-aNsjjo”系を頻繁に目にするようになると、新たに設置する際にますます“-ahaNsjo”系よりも“-aNsjjo”系の使用が定着するのではないだろうか。

つまり、会津方言の方言景観において、観光客向けのもが増加し、尊敬命令表現が増えたが、詳しく見ると“-aNsjjo”系の表示が多く見られる一方、“-ahaNsjo”系は生産性が失われ「おわいなはんしよ」一つが定型化して、例外のようになってしまったのである。従来の会津方言では菅野(1982)や前述のE氏への聞き取り調査より、“-ahaNsjo”系からφ形（待遇表現のない命令形）まで4つのバリエーションが存在していることが分かるが、方言景観においては「おわいなはんしよ」を除くと“-aNsjjo”系、“-(Q)se”、φ形の3つに集約されていると言える（表2）。

従来の会津方言	方言景観の会津方言
“-ahaNsjo”系	“-aNsjjo”系
“-aNsjjo”系	
-(Q)se	-(Q)se
φ	φ

表2. 方言景観の会津方言に見られる尊敬命令形

なお、“-(Q)se”については、待遇度がそれほど高くないためか、観光客向けにはあまり見られなかったが、テナントショップの店名に「アイバッセ」（行きましょう）¹²というものが見られた（図17）。



図17. アイバッセ（2016年）

方言景観では、このような待遇表現の減少が見られ、また、“-aNsjjo”系ばかりが見られることによる待遇表現の固定化が考えられるのだ。ロング・斎藤(2016)では、中通りの福島市で待遇表現のバリエーションが減り、「らんしょ」（本稿の“-aNsjjo”系と同形式）が拡大しているという本稿と同様の現象が報告されている。会津地方でも福島市周辺でも“-aNsjjo”系が残ったという点は、前述の「福島県共通語」に似たものを感じざるを得ない。

8. まとめ

以上、震災後の会津地方に見られる方言景観から、会津方言の変容について見てきた。その結果、1.大河ドラマによる方言景観の増加は一時的・流行的なもので終わってしまうこと、2.観光事業のキーワードとして「会津」を押し出すことで南会津方言域でも観光方言としての会津方言の方言景観が進出していたり、「福島県」が一体となった方言エールを発する際は復興方言として一種の「福島県共通語」が使用されたりしていること、3.方言景観の会津方言に見られる尊敬命令形としては、従来最も待遇度の高い“-ahaNsjo”系が「おわいなはんしょ」を例外的に残すのみで使用されず、その次に高い“-aNsjjo”系がほとんどを占めていることが明らかとなった。

本稿では、方言景観を出発点に、会津方言の様々な変容について垣間見ることが出来た。これまで、観光資源として方言を活用しようといった、方言が観光事業に寄与する方向の話が多かったが、今回は、観光事業などによって設置された方言景観に

¹² 「あいば(っ)せ」は「あいぶ」（行く）に“- (Q)se”が接続したものであり、標準語に直訳すれば「行きなさい」となるが、実際には勧誘に似た意味合いを含んでおり、「行きましょう」の意味で発話者自身も一緒に行く場合に使われる。“-(Q)se”の中でも少々珍しい例である。

見られる方言について聞き取り調査なども交えて考えるという、観光事業が方言研究に寄与する一面も窺えた。これは方言景観だけでなく、国内の外国語表示でも同じことが言える(斎藤 2015b)。ことばと観光事業との関係は今後も双方向から注目していく必要がある。

謝辞

本稿は JSPS 科研費基盤研究(B)15H03204「無敬語地帯の地域特性と敬語行動—日本語敬語研究の再起動をめざして—」(研究代表者:中井精一)の助成を受けて行われたものである。

また、調査に協力して下さった五十嵐光弘氏、稲村キミ子氏、稲村忠兵エ氏、斎藤悦子氏、斎藤誠二氏、福田なつき氏(五十音順)にお礼申し上げます。

参考文献

- 飯豊毅一(1964a)「福島県方言における対者尊敬表現について」『国語学』59 武蔵野書院
- (1964b)「南奥方言と関東方言との境界について—福島県を中心として—」日本方言研究会編『日本の方言区画』東京堂
- 井上史雄、大橋敦夫、田中宣廣、日高貢一郎、山下暁美(2013)『魅せる方言—地域語の底力—』三省堂
- 今村かほる(2015)「医療・福祉と方言—応用方言学として—」日本方言研究会編『方言の研究』1 ひつじ書房
- 菅野宏(1982)「福島県の方言」飯豊毅一、日野資純編『講座方言学4—北海道・東北地方の方言—』国書刊行会
- 国立国語研究所編(1999)『方言文法全国地図 第4集—表現法編1—』財務省印刷局
- (2006)『方言文法全国地図 第6集—表現法編3 (待遇)—』財務省印刷局
- 児玉卯一郎(1974)『福島県方言辞典』国書刊行会(1935年に西澤書店から刊行されたものの再版)
- こなん(ペンネーム)(2007)「江戸の町並み大内宿」<http://community.travel.yahoo.co.jp/my-memo/conan41/blog/13.html>
- 斎藤敬太(2015a)「ブラジル人集住地域のリングフランカー—群馬県大泉町と三重県伊賀市の比較—」『日本語研究』35 首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会
- (2015b)「外国人住民の言語環境としての観光—ブラジル人集住地域の群馬県大泉町と三重県伊賀市の比較—」『第30回日本観光研究学会学術論文集』日本観光研究学会
- 斎藤敬太、志喜屋カロリーナ(2014)「外国人集住地域の言語景観からみる多文化共生のあり方」多文化社会実践研究・全国フォーラム(第8回) 口頭発表原稿(東京外国語大学、2014年12月)

- (2015)「中南米系外国人集住地域の言語景観における伝達意図の阻害要因」『日本語研究』35 首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会
- 竹田晃子(2012)『東北方言オノマトペ(擬音語・擬態語)用例集—青森県・岩手県・宮城県・福島県—』 国立国語研究所
- 龍川清・佐藤忠彦(1983)『会津方言辞典』 国書刊行会
- 田中宣廣(2016)「方言の拡張活用と方言景観」井上史雄、木部暢子編『はじめて学ぶ方言学—ことばの多様性をとらえる28章—』 ミネルヴァ書房
- 中井精一(2011)「言語景観に見る地方都市の文化的脆弱性」中井精一、ダニエル・ロング編『世界の言語景観 日本の言語景観—景色のなかのことば—』 桂書房
- 山下暁美(2014)「命綱としての日本語—「災害時命綱カード」の提唱—」『応用言語学研究』16 明海大学大学院応用言語学研究科紀要編集委員会
- ロング, ダニエル(2009)「南大東島ことばが作り上げる言語景観」中井精一、東和明、ダニエル・ロング編『南大東島の人と自然』 南方新社
- ロング, ダニエル、今村圭介(2012)「伊賀上野の多言語・多方言の言語景観」『日本語研究』32 首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会
- ロング, ダニエル、斎藤敬太(2016)「隣接する無敬語・敬語地帯の言語景観にみられる待遇表現の違い(福島市編)」『人文学報』512-7 首都大学東京人文科学研究科

(さいとう けいた・首都大学東京大学院博士後期課程)